

兵庫・神戸大学医学部附属病院構内遺跡

1 所在地 神戸市中央区楠町七丁目

2 調査期間 一九九四年(平6)一〇月～一二月

3 発掘機関 兵庫県教育委員会

4 調査担当者 吉田 昇・岡崎正雄・水口富夫

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 縄文時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

当遺跡は、神戸大学医学部附属病院構内遺跡として発掘調査を実施しているが、神戸市教育委員会発行の遺跡分布地図による楠・荒



(神戸)

田町遺跡の東側の一角をなすものである。遺跡は、中央区・兵庫区にまたがり南北二二〇〇m東西八〇〇mが遺跡の範囲と推定されており、縄文時代後期から近世にいたる複合遺跡である。兵庫県教育委員会では、附属病院の改築計画によって、

順次発掘調査を実施してきた。

今回、報告する調査は、構内の南西にあたる医学部本館の建替えによるもので、地下構造をもつ本館を避けて、建物の南側(A区)と西側(B区)にL字形に調査区を設定した。調査面積は、三九二㎡である。

調査区のうち、西側のB区はA区に比べ遺構面が一・五mほど高くなっているが、後世の削平を受けたため遺構はほとんど残っていない。

いっぽう、A区では、地表下3mに遺構面があり、一二～一三世紀の柱穴が存在するが、調査区が狭いため建物を復原することはできない。また、この調査区は病院内で最も低い位置にあり、遺物包含層も八〇cm堆積している。

木簡はA区のほぼ中央にある井戸から出土した。この井戸は、一辺九〇cm、遺構面からの深さ二・五mの方形横棧縦板組井戸である。掘形を含めた井戸の大きさは、直径三・五mと推定される。井戸掘形の約半分は、医学部本館建物の下に及ぶため調査できていない。

井戸の横棧は、三段残っており、それぞれほぞ穴によって組み合わされている。横棧の内法は、七五cmあるが、土圧によってやや歪んでいる。井戸内部に落ち込んでいた横棧の残欠から推定すれば、少なくとももう一段があったと考えられる。横棧を支える隅柱は、各段の横棧を長さ四五cmの独立した支柱で支える特殊な構造となっ

ている。横棧の外側は、各面とも三〇～四〇cm幅の縦板で二重に覆われている。

出土遺物は、井戸の中心から上に集中している。その下には人頭大から一抱えもある川原石が埋没していて、この井戸がある時期に人為的に埋められたであろうことを示している。出土した遺物は、呪符木簡四点、漆塗椀一点のほか、多量の須恵器・土師器・輸入磁器がある。これらの出土遺物から、この井戸は一三世紀前半に掘られ、一四世紀前半には廃絶したとみられ、木簡は井戸の廃絶に伴うものと推定される。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「>咄吠唳(符籙)山五鬼急々如律令」 287×28.5×3 033
- (2) 「咄吠唳」 151×(25)×4 019
- (3) ・「咄吠唳(符籙)急如□×
- ・ (天地逆) (154)×25×3.5 019
- (4) 「読誦」 267×(39)×3 011

釈読にあたり、奈良国立文化財研究所綾村宏氏・館野和己氏・古尾谷知浩氏のご教示を得た。
(水口富夫)

